

和漢古典籍の書誌作成

―無刊記本の刊年推定とNC入力への試み―

和漢古典籍研究分科会

中央大学図書館	植苗 翔
学習院女子大学図書館	生田 陽子
専修大学図書館	飯泉 慎也
獨協大学図書館	高浜 みのり

1. はじめに

和漢古典籍資料を扱っていると、様々な問題に直面する。今期分科会員から出てきたのは、目録を作成する上で問題となる無刊記資料の刊年推定方法と、現在必要性が増している古典籍資料の書誌データ化に向けて、どのように業務を行っていけばよいかということであった。

2. 無刊記本の刊年推定

和漢古典籍の書誌調査をしている時、見返や奥付に刊年が記載されていない書物をみかける。このような、見返や奥付などに出版地、出版者、出版年の記述が無い資料のことを無刊記本と呼ぶ。出版年の表記が書物の中に見つからないと目録中の表記も「出版年不明」、「清刊本」、あるいは「江戸期刊本」などとせざるを得ないが、これではあまりにも大まか過ぎるといえる。そこで今回我々は、日頃接することの多い刊本を取り上げ、刊行年代の推定を可能にする様々な手がかりを調査した。本稿ではそれらの手がかりを紹介した後、刊本のうち特に唐本について、実例を用いて刊年の推定を試みる。なお、刊年推定の際は、一つの手がかりだけで決めてしまわず、複数の手がかりから総合的に判断し、かつ自信が無ければ控え目な表記にすべきなのは言うまでもない。

さて、手がかりとしてまず挙げられるのは、序跋である。見返や奥付などに刊年の記述が無くても、本文前後の序や跋などにその序跋が書かれた年月日を、あるいは序跋の内容に刊行した年月日についての記事を見出すことができる場合がある。

唐本においては、序跋の日付に宋代、元代、明代前半などと記載されている場合、その日付は実際に書物が刊行された時期と異なることが多くあるため、刊年推定にはあまり役立たない。しかし、明代後半や清代の年月日のある序跋は役に立つことが多い。

和本においては、和刻本漢籍は中国で刊行された本を日本で再度刊行したものであるから原本の中国人による序跋の日付は刊年推定にはほとんど役立たないが、日本人による「重刻（何年何月）序」や「校（何年何月）序」といった記述は大変役に立つ。また国書でも自序あるいは自跋は推定の手掛かりになる可能性が高い。刊行した旨の記事として、序文あるいは跋文中に「（何年何月）本を梓に上す」などの記述があれば、大きな手掛かりとなる。

次に挙げられる手がかりは、版元つまり出版者である。これは特に和本の場合に有効である。刊行年代が明記されていなくても、和刻本漢籍や国書の場合、版元の記述があれば、井上隆明著『近

世書林板元総覧』(青裳堂書店)からその版元が活動し始めたおおよその年代を知ることができる。

次に唐本において有効になるのが、避諱という慣行である。避諱とは、中国において、尊ぶべき人物やその時代の皇帝の諱の表記を避けることをいう。避諱の方法は、その皇帝の諱に使われている漢字を同じ音や同じ意味の字で置き換える、字の一部を削る、空白にするなど様々である。この慣行を利用すると、ある皇帝の諱に使われている漢字が削られている場合、その本はその皇帝の治世中かもしくはその後刊行されたものではないかと推測できる。紀元前7世紀の周時代に始まったこの避諱という慣行がどの程度徹底されているかは王朝によって異なるが、清代、特に康熙帝の時代以降は厳密に行われているため、清代の書物を扱う場合には大変有力な手掛かりになる。王彦坤編著『歴代避諱字彙典』(中華書局)や陳垣著『史諱举例』(上海書店出版社)を用いると、歴代王朝の皇帝たちの諱や、どのような字に対して避諱が行われているかを知ることができる。

また、調査している書名を、叢書の子目の単位まで掲載している『京都大学人文科学研究所漢籍目録』や『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』といった目録で調べると、それが叢書の一部であることが判明する場合がある。更に、目録に示されている叢書名を上海図書館編『中国叢書綜録』(中華書局)、陽海清編撰『中国叢書廣録』(湖北人民出版社)などで調べると、叢書の全体構成や刊年を確認できる。ただし、同一書名同一著者の書物が幾つかの叢書に集録されている場合もあるので、注意が必要である。

この他に参考となるものとしては、まず紙がある。紙は和、唐本とも年代によって、質や手触りが異なる。ただし中国の場合は地方によっても異なることがある。

次に、著作者などの生没年や蔵書印、書き入れなども挙げられる。これらを調べることにより、少なくとも刊行がこの年代よりは遡らないである

うという年代が分かる。

表紙の色も特に和本の場合に有効であるが、こちらは2008～2009年度に当分科会が報告大会で発表し、『私立大学図書館協会会報』134号に掲載しているため、参照されたい。

また字の姿、いわゆる字様も手掛かりになる。唐本では、王朝によって、また同じ王朝の中でも各皇帝の治世によって、刊本の字様に特徴がある。例えば宋代であれば、欧陽詢、顔真卿、柳公権といった唐時代の楷書の名家の書体を真似て版下書きを作成し、版本が作られている。また13世紀の元代では、楷書によって高名な趙孟頫の書体が版本の字様に影響を及ぼしたとされている。そして明代の万暦帝頃は骨太でどっしりした字、崇禎帝頃はやや縦長の字とされる。また清代においては康熙帝の頃は非常にバランスのとれた字、雍正帝の頃は康熙帝頃のものに比べると線に太い部分と細い部分があり少しなよなよした柔らかい印象を受ける、といったように皇帝の治世によって字様に特徴が見られる。ただし、刊行する機関や地域によって例外も多くあることに注意を要する。参考文献として北京図書館編『中国版刻図録』(文物出版社)や静嘉堂文庫編『静嘉堂文庫宋元版図録』(静嘉堂文庫)などがある。

版木を彫った職人の名前である刻工名の有無も手がかりになりうるが、刻工名が刻まれた書物は宋元版に多く、明や清時代の書物にはさほど見られない。また、蔵書印に関しても、時代により印の大きさを変えたり、朱肉の色を変えたりしているが、偽印も有り複雑な側面がある。

以上のように、唐本、和本それぞれに様々な手がかりがあるが、一つの手がかりだけで決めてしまわず、複数の手がかりから総合的に判断し、かつ、自信が無ければ控え目に推測した方がよい。

続いて実際の書物を例にとり見ていく。今回は『尚書説』を例に刊年の推定を行ってみる。『尚書説』とは、五経のうち『書経』の古名である『尚書』の解説書で、南宋の黄度(1138～1213)の著

作である。この書物には刊記や奥付が無く、また刊行された年代の記述もない。しかし『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』で書名を調べると、この『尚書説』が「通志堂経解」というシリーズの一部であることが分かる。さらに「通志堂経解」を、『中国叢書総録』で調べると、「通志堂経解」の全体構成が分かり、さらに「通志堂経解」には康熙帝時代の1680年に刊行されたものと同治帝時代の1873年に刊行されたものの2つの版があることが分かった。

ここで登場するのが、『尚書句解』である。『尚書説』の版心の下部には「通志堂」とある(図1)が、この『尚書句解』の同じ部分にも「通志堂」とある(図2)。そこで『中国叢書総録』を参照すると、やはり『尚書句解』も「通志堂経解」の一部であることが分かった。そして『尚書句解』の巻尾を見ると「後学 成徳 校訂」としか書かれてない(図3)が、『尚書説』の巻尾を見ると「巴陵鍾謙鈞重刊」とも書かれている(図4)。このことにより、この2冊は属するシリーズの版が違い、『尚書句解』は康熙帝時代の版、そして『尚書説』は重刊で、同治帝時代の版であることが判明した。

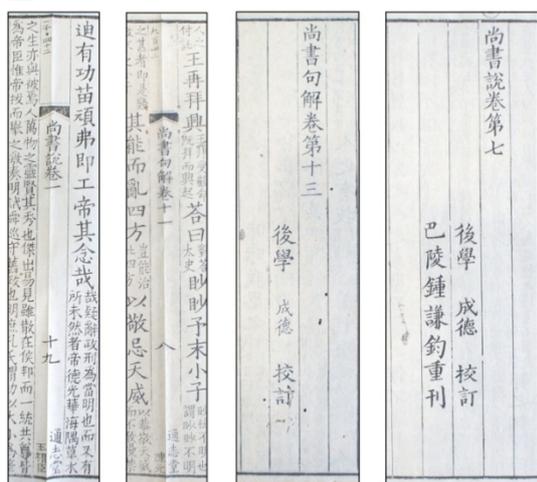


図1 図2 図3 図4

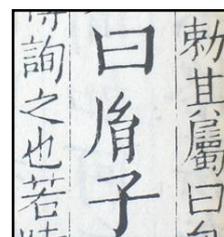
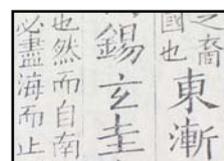
ここでやや脇道にそれる。先ほど版心下部に「通志堂」という文字が入っていることから『尚書句解』という本を見つけたが、この版心下の部分には筆名、書齋号、書店の屋号が入ることが多い。そこで陳乃乾編『室名別号索引』(中華書局)のよ

うな参考図書で調べると、この「通志堂」が「納蘭性徳」という人物の室号であることが分かった。さらに劉徳重他編『中国歴代人名大辞典』(上海古籍出版社)で調べると、納蘭性徳が「通志堂経解」を編纂した清朝の文人であることも分かった。また、『尚書説』の巻尾に「後学 成徳 校訂」とあるが、この「成徳」が納蘭性徳の初期の名前であることも分かった。ちなみに『尚書説』の「通志堂」の文字の左に「王相臣」(図1)という名前があるが、これは刻工名である。

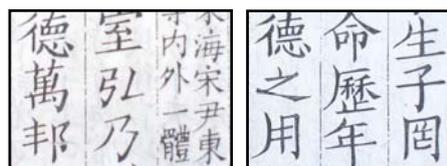
次に表紙に着目してみると、「雲煙家蔵書記」(右図)という蔵書印がある。これを渡辺守邦他編『新編蔵書印譜』(青裳堂書店)で調査すると、江戸時代後期の鑑定家、安西雲煙のものであることが分かった。このように、蔵書印や版心下の記述が手がかりになる場合もある。

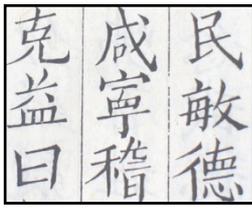


それでは本題に戻り、避諱という慣行を利用して推定した刊行年代の裏付けの取り方をみてみよう。まず『尚書説』に「玄」という字があるが、最後の一笔がない(右図)。これは康熙帝の諱、「玄燁」を避けたものである。次に「胤」という字があるが、これは右側がない(右図)。これは康熙帝の次の皇帝、雍正帝の諱「胤禛」を避けたものである。他にも、乾隆帝の諱の「弘曆」を避けたものもある(下図)。また「寧」

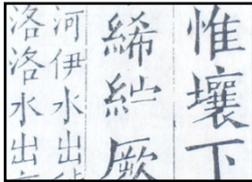


の字も心の部分が略されているが、これは第8代道光帝の諱「旻寧」を避けたもので





ある(左図)。そして「紵」という字は傍の縦棒が削られている。これは咸豊帝の諱「奕訢」を避けたものである(左図)。これらのことから、この本は少なくとも咸豊帝の時代かそれより後に刊行されたものと推定することができる。



また、『尚書句解』についても避諱を調べてみると、「玄」や「胤」の字は最後の一笔が削られているが「弘」や「曆」、「寧」など乾隆帝以降の諱は削られていないため、版は康熙帝時代であるものの、刊行は雍正帝の頃であると推定できる。

以上のように、刊年の表示が無い書物であっても、手掛かりがないかいろいろな面からよく観察し、適切な参考図書を用いることで、ある程度刊年を推定することができる。また、『尚書説』に対する『尚書句解』のような、比較検討しうる書物を見つかることができれば、大きな手がかりとなる。その結果、従来「江戸期刊本」「清刊本」といった大まかな書き方しかできなかった資料に対して、「江戸前期刊本」「清初刊本」などと、より絞り込んだ書誌記述を可能にすることができるのである。

3. NC 入力への試み

一対象資料『諸家人物誌』を例に

ここでは、無刊記本を含む同版3点が揃った『諸家人物誌』を例に、刊年の推定を試みるとともに、NACSIS-CAT (以下NCと略す) フォーマットへ変換していく手順を述べる。3点の資料を区別するために、それぞれABCと振り比較していく。

まず表紙を見ると、表紙の色やサイズは異なるが、題箋は同じである(次図)。



A

B

C

見返しは、題署の書名自体は同じであるが、レイアウトがAとBCで異なる(下図)。Aのみ刊行年として「寛政庚申新刻利涉堂梓」の記載があり、BCには「大阪書肆 合刻」と出版者名があるだけで、刊行年の情報は無い(下図)。



A



B



C

題識は、Cのみ刊記がなく、刊記部分が削られていることがわかる(下図)。このことから、CはABよりも後に刊行されたと判断することができる。ここでは、3書誌を比べることで、単独ではわかり得なかった刊記につながる重要な手掛かりがつかめた。



A



B



C

次に、巻首を見ると、形式はABCとも同じであり、本文も同一であることがわかる。見返しや題識ではそれぞれ異なる部分があるが、全体を比較して、本文の版式が同一であることから、本文はABCとも同じ版木を使って印刷されていると

判断できる。今回のように同一資料の比較をする場合、版式が重要になる。外側の大きさは紙の裁断によって変わるが、同一の版木を使っている版本は、版式が等しくなる。

最後のページの奥付はABCともに大きく異なる。Aは「寛政12年庚申正月改刻」とはっきり年号が記載されている（下図）。また書林の柏原屋嘉兵衛を『享保以後江戸出版書目』で調べると、寛政12年刊と記載があることから、寛政12年に刊行されたものであることが判断できる。

Bは年号の記載はないが「大坂河内屋茂兵衛」を『近世書林板元総覧』で調べると、この時の住所から文化・文政頃の刊行であることが推測できる（下図）。

Cも年号の記載はないが、「東京府」とあることから明治期の刊行であると判断できる（下図）。



A

B

C

以上のことから資料Aの刊記は、「寛政12年（1800）大坂利涉堂柏原屋嘉兵衛等刊本」

資料Bの刊記は、「[寛政12年刊]文化文政年間大坂河内屋茂兵衛等後印本」

資料Cの刊記は、「[寛政12年刊]明治期東京大川錠吉後印本」となる。

ただし『国書総目録』によれば、寛政4年刊本もあるとされているが寛政4年刊本と寛政12年刊本とを校合して版の異同の調査をしていないので、この3点で刊年をまとめた結果、資料Aの刊記を「刊本」と修する。もし寛政4年刊本と比較し、内容に異同がなければAは「後印本」、異同があればAは「重刊本」となる。

今まで当分科会ではこれらの調査結果を調書

（図5）に記録するだけであったが、近年ではそれをNCに入力する必要が出てきたため、調書からスムーズにNC入力ができるようNCフォーマットを作成した（表1）。調書に記入した事項をNCフォーマットへ転記していく。

まずフォーマットの一番上に刊年を記入するが、これは調書の⑧刊記・奥付からとり、ない場合は②刊記からとる。

次に出版国コード、本タイトルの言語コード、本文の言語コード、原本の言語コードは、目録カード部分の右横に記載した項目を参考にいれている。

巻冊次等で複数冊がある場合は調書右端の丁数のところからとる。また③総巻数も参考にする。

タイトルおよび責任表示に関する事項は④本文巻首題署からとり、ない場合は①題箋題や②封面の題署、③序題や目録題、凡例、⑥巻尾題からとる。本タイトルに採用しなかった書名はその他のタイトルに記入する。

出版頒布に関する事項は、⑧刊記・奥付から、なければ②刊記からとる。

形態に関する事項は、調書の①大きさや③総巻数や調書右端の丁数からとる。

注記は12項目設けた。一番初めに、書誌作成単位に関する注記として、「和漢古書につき記述対象資料毎に書誌レコード作成」と必ず記載する。その次に、写本、通則、書誌学的通称名、タイトル、責任表示、出版、版式、巻冊次と残欠、装丁、印記について注記すべきことがあればこの順に記載し、最後に上記項目に当てはまらないが記載すべきことがあれば、その他の注記として記載する。著者名は、④本文巻首題署、②封面・副葉子等からとる。

4. まとめ

これまで分科会の主眼は、調書を取り、和漢古典籍資料への理解を深めることまでであったが、近年では、目録はすべてデータ化しているため、

調書を作成したらそれで終わりではない。そこからさらにNCの項目に沿って、書誌データを作成する必要がある。

分科会で作成している調書の調査項目は、ほぼ書物のページ順であり、本のページをめくりながら必要な情報を順番に正確に取っていくことができるようになってきている。しかし、当分科会においても和漢古典籍資料のNC書誌データ作成に関しては初心者が多く、NCの入力項目と調書の項目の対応関係が判然とせず、調書の内容からどのようにNC書誌データを作成したらよいか、活動を通しての課題となっていた。この課題を解消するために分科会で作成したのが、NCフォーマットである。

これを使うことで、スムーズにNCへのデータ入力を行うことができる。さらに、調書からNCフォーマットへ記入する際、入力内容の精粗を選択できるというメリットもある。このフォーマットを利用して、少しでもデータ入力の件数が増加すれば幸いである。

図5 (A記入例)

The image shows a complex form with multiple columns and rows, containing fields for bibliographic information such as title, author, and publication details. It appears to be a template for entering data into a database.

http://www.jaspul.org/e-kenkyu/kotenseki/document/rec_paper.xls

表1 (A記入例)

NCフィールド名	NII項目名	調書項目	A
YEAR	刊年		1800
CNTRY	出版国コード	唐本・朝鮮本・和本	ja
TTL	本タイトルの言語コード	漢籍・準漢籍・韓書・国書	jpn
TXTL	本文の言語コード	漢文・満漢合璧・諺文・和文	jpn
ORGL	原本の言語コード		
REPRO	複製コード		
VOL	巻冊次等		
TR	タイトル及び責任表示に関する事項	①②③④⑤⑥	諸家人物誌 2巻 / 南山道人纂述 ショカ ジンブツシ
VT	その他のタイトル	①②③④⑤⑥	VT:OH:諸家人物考 ショカ ジンブツシ VT:OH:日本諸家人物誌 ニホン ショカ ジンブツシ VT:OH:日本諸家人物志 ニホン ショカ ジンブツシ VT:OH:諸家人物志 ショカ ジンブツシ
ED	版にかんする事項		
PUB	出版・頒布にかんする事項	③⑦⑧	PUB:大坂: 柏原屋嘉兵衛 PUB:江戸: 西村源六, 寛政 12. 1[1800]
PHYS	形態に関する事項	①	PHYS:6, 74, 25 丁; 16cm
NOTE	書誌作成単位に関する注記		NOTE:和漢古書につき記述対象資料毎に書誌レコード作成
NOTE	写本に関する注記		写本(和古書)・鈔本(漢籍)
NOTE	通則に関する注記(巻頭以外の情報源とした場合等)	①②③④⑤⑥⑦⑧	
NOTE	書誌学的通称名、本文の系統等に関する注記		印刷状況 宋版・蒙古刊本等
NOTE	タイトルに関する注記	①②③④⑥⑦⑧	NOTE:見返しの書名: 日本諸家人物誌 NOTE:序の書名: 諸家人物考 NOTE:目録の書名: 日本諸家人物志 NOTE:版心の書名: 諸家人物志
NOTE	責任表示に関する注記	③⑦	
NOTE	出版に関する注記	②⑤	NOTE:見返しに「其間先生閑 / 日本諸家人物誌 / 寛政庚申新刻和涉堂」とあり NOTE:奥付に「寛政十二年庚申正月改刻 / 書林 江戸石町二丁目 西村源六 / 大坂心齋橋博勞町 柏原屋嘉兵衛」とあり
NOTE	版式(版面)に関する注記	⑤	NOTE:四角半辺無界 11 行、白口無魚尾、内匡郭: 12. 0×8. 5cm
NOTE	巻冊次と残欠の注記		
NOTE	装丁に関する注記		
NOTE	印記に関する注記		
NOTE	その他(注、訓点、節付記号、識語、書き入れ、付箋、等)	③⑤⑦	NOTE:題識「皆川原題寛政己未(寛政 11[1799]) 季冬八日」
CW	内容著作注記		
PTBL	書誌構造リンク		
AL	著者名リンク		AL:池永, 豹 イケナガ, ハダラ <DA12527266>
UTL	統一書名典拠リンク		
CLS	分類		